

清末小説から 89

2008.4.1

『繡像小説』研究の現在.....	樽本照雄 1
November Joeの中国語訳(上).....	渡辺浩司 8
晩清小説作者掃描(拾肆).....	武 禧15
「林訳小説叢書」の作品数.....	沢本香子17
清末小説から	22

本号の『繡像小説』にしても、次号掲載予定の海賊版『官場現形記』にしても、利用する資料は新聞です。中国でもその有効性が認められてきたということでしょう。それができる環

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

『繡像小説』研究の現在

樽 本 照 雄

『繡像小説』に関して、特に刊行情況と編者について論じた文章がようやく発表された。

『繡像小説』は、有名であるにもかかわらずいくつかの問題をかかえている。すでに一部では相当に深いところまで掘り下げて論議されているのが事実だ。た

だ、追跡検証を行なう研究者がいなかっただけ。提起された問題は、放置され検討されてこなかった。「ようやく発表された」と書いたのはそういう意味だ。

『繡像小説』をめぐる問題

『繡像小説』には、どういう問題があるのか。該誌をめくって論争が行なわれた経過を簡単に説明する。

きっかけは、編者問題だった。すでに20年以上も昔のことになる。

定説では、『繡像小説』の主編者は李伯元ということになっていた。だが、そうではないと異論が提出され、いや、やはり李伯元なのだとの大論争が発生した。論争になったのは、1984年以降のことである。その過程で、李伯元と劉鉄雲の盗用問題があらためて浮上する。さらに加えて『繡像小説』の刊行が遅延している、

と新説が出されたのだ。

『繡像小説』という有名雑誌の、周知のはずの編者と刊行時期について従来とは違う説がでてきたのだから学界の注目を集めたのも当然だろう。しかも作品の盗用問題までも伴っている。

つまり、『繡像小説』には3件の問題がもともと存在しているのだ。

ひとつは、いうまでもなく『繡像小説』の編者問題だ。もうひとつは李伯元と劉鉄雲の盗用問題で、みっつめが刊行遅延問題である。この3点が複雑にからみあっている。

主編者が李伯元であることについては、のちに決定的な資料が発掘された。当時の新聞広告だ。雑誌の発行元である商務印書館が、新聞広告で李伯元を特に招いて編集してもらったと公表していた。動かぬ証拠だから、編者問題はこれで解決である。私はそれについて最終論文を執筆した。「『繡像小説』編者問題の結末」(『清末小説から』第62号2001.7.1)という^{*1}。

残りの刊行遅延問題と盗用問題についてはまとめのつもりで、「李伯元は死後も『繡像小説』を編集したか」(同上第64号2002.1.1。両論文ともに拙著『清末小説叢考』汲古書院2003.7に収録)を書いて説明した。

雑誌停刊時期に関する従来からの定説は、こうだ。

光緒三十二(1906)年三月李伯元の死去によって雑誌は停刊した。

これが定説になったのには理由がある。

『繡像小説』が半月刊の刊行を遵守し

たならば、その最終号である第72期は光緒三十二年三月に出たはずだ。これと李伯元の死去がちょうど重なる。このあまりにも好都合な一致は、偶然だとは思えない。すなわち李伯元の死去によって『繡像小説』は停刊した。研究の権威である阿英がそう断言している。ゆえに定説になった。

ところが、前述のとおり刊行遅延説が提出される。予想していなかっただけに私は驚いた。私はその時まで定説を信じていたからだ。

重要問題が提起されている。それについて私なりの検討を行なった。第1年、第2年の発行遅延状況を探求したうえで停刊の時期は光緒三十二(1906)年末であろう、という仮説を出したのだ。定説に比較して約十ヵ月も遅れていることになる。約十ヵ月といえばほぼ一年近い時間だ。無視していいわけがない。

この仮説を出すために私が利用した資料は、当時の新聞記事と広告である。それが私なりの工夫であった。

雑誌刊行の期日が問題になっている。

普通は、雑誌に日にちの記載があったとしても実際に発行された期日と一致するとは限らない。記載よりも早かったり遅かったりするの常識だ。

ただ、『繡像小説』が複雑なのは、雑誌そのものに刊行の記載が途中から消失しているからだ。ゆえに従来は、半月刊が守られたとして、という前提のもとで停刊を光緒三十二年三月といていたにすぎない。その前提を忘れ、阿英の断言もあったからそれがいつのまにか定説に

なった。確かな根拠は、もともとなかったのである。

発行元の商務印書館に業務日誌のようなものが保存されており、発行期日が記録されているならば話は別だ。だが、記録の存在は確認されていない。商務印書館内部の記録がないとすればどうする。なにを利用すれば『繡像小説』の刊行期日を特定できるか。私が工夫したのは、まさにこの部分だった。

外部で公開された資料を利用するほかない。そこで、日付のある新聞に着目した。商務印書館が雑誌の刊行を広告している。あるいは、雑誌が到着したと新聞記事になっている。日付のある資料としては新聞が信頼できると考えた。

この問題に関して新聞を資料に使う研究者は、私を除いてはいなかった。私が最終的に使用したのは、『世界繁華報』、天津『大公報』、『中外日報』、『申報』、『東方雑誌』、『同文滬報』などだ。最初からそれらのすべてが揃っていたわけではない。中国で発行されていた新聞雑誌だから、原紙を直接に利用できる状況ではなかった。時間をへて影印本になる、マイクロフィルムが作製されるなどともなって利用できる資料が徐々に増えてきた。一箇所に資料がまとめて置いてあるわけでもない。閲覧するため日本国内のいくつかの場所に行ったし上海図書館にまで足を運んだ。だからこそ約20年という時間が必要だったのだ。利用できる資料が増えるにともない、同じ主題で私がりかえし文章を発表した理由でもある。ただし、雑誌刊行の期日を追求する

といっても新聞の記事広告を利用するのだから、おおよその推測しかできないのは明らかだ。広告は出たが実際の刊行には時間的なズレが生じる可能性もあるだろう。そう私は認識している。

雑誌の刊行が遅延していただけではすまない。なぜかという、『繡像小説』についていえば、主編者の李伯元が死去した時期がからんでくる。上述のように、以前の定説では李伯元の死去に連動して雑誌が停刊したことになっていたではないか。その根拠がくずれた。これはなにを意味するか。李伯元の死後も『繡像小説』は出版されていたのだ。この事実は、彼の作品についての疑問を生じさせる。李伯元の作品であるはずの「文明小史」などが一部分とはいえ彼の執筆ではなくなる。私の考えは、彼の友人歐陽鉅源が書き継いだというもの。問題をすでにそこまで掘り下げて述べている。

「文明小史」が「老残遊記」から文章の一部を盗用したのは、李伯元の生前に1回、彼の死後に1回発生したことにもなる。

結論をいえば、『繡像小説』の編者問題は解決している。今まで異論は提出されていない。結果的に従来定説、すなわち主編は李伯元説を肯定するものになった。しかし、信頼できる証拠を示しているところが今までとは異なる。証拠資料があるとなしでは大違いだ。

ところが、残りの盗用問題と刊行遅延問題については、学界ではなんの反応もない。研究者は、無視して現在にいたっている。

無視する人の心理は不明だから想像するほかない。

その理由のひとつは、刊行遅延については資料的な裏付けが得にくい。私がいくら新聞を示し説明してもなかなか受け入れがたいらしい。専門家である王燕が『繡像小説』影印本(北京図書館出版社2006.4)の解説を書いて、あいかわらず「1906年4月に第72期を発行したのち停刊した」と定説を信じている。以前から異論が提出されているにもかかわらず。そればかりか、盗用問題になると複雑な事情があってどう理解していいのかわからないと見える。もっとも北京図書館出版社版『繡像小説』は、特殊な影印本だ。つまり、使用した雑誌はもとから原形を留めていない。連載作品をひとまとめにして分類しなおした編集本だ。雑誌の初出とは違うのだから、刊行が遅延していたなどの問題が理解できるはずがない。

もうひとつ理由があるとすれば、私が見るところ、『繡像小説』の刊行について問題があると認めると、やっかいな課題が自動的に出現するからだ。手に負えないほどに「やっかい」だから無視せざるをえない。つまり、李伯元の死去がこれに関係する。くりかえすと、刊行遅延が事実であるならば李伯元死後も雑誌が発行されていた。李伯元の死後に発表された「文明小史」などは一部分が彼の作品ではないことになる。定説が否定される。文学史を書きかえる必要がでてくるのだからやっかいに違いない。

昔は、該誌全72冊の完揃いそのものを見るのがむつかしかった。研究が進ま

なかった理由にしてもかまわない。だが、現在は影印本が出版されているから、比較的便利にはなっているといえる。だが、このなんでもなさそうな小説専門雑誌『繡像小説』が、その内部に以上の問題3件を複雑にからみあわせて抱え込んでいる。研究者が手を出しにくい課題だといえるかもしれない。

私にしてみれば、資料を収集しそれらにもとづいて私なりの見解をすでに提出している。それをほかの研究者はどのように考えるのか。それを知りたいと長く思っていた。

そこで、冒頭の「ようやく発表された」文章を読んでみた。

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」(『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5.15)である。

文迎霞論文について

表題どおり『繡像小説』の刊行情況、停刊、編者について検討した論文だ。

該文には、「要約[摘要]」がついている。論旨を理解するためには便利だから最初に紹介しよう。要約をさらに要約すれば、以下のようになる。

『繡像小説』は清末小説史において重要な地位を占めているが、刊行については解決しなければならない問題が少なからずある。当時の新聞には出版刊行の広告が掲載されているからそれによって分析する。該誌第1年24期には重大な遅延状況があり、順次延期されてその停刊時期の下限は光緒三十二年十二月十七日(1907.1.30)である。編者は李伯元だ。

うーん、と思わず声が出そうになる。「十二月十七日」と細かく特定している。私が提出した見解とそれほど違っているわけではない。ここまで精密に指摘したのは、研究を前進させたことになる。大いに期待がもてる。ただ気がかりなのは、この要約を見る限り、盗用問題と李伯元死去後の刊行継続については言及がなさそう。

即断は禁物だ。論述にそって検討しよう。

冒頭の、いわば「まえがき」部分において文迎霞が使用した資料をあげている。

『新聞報』、『申報』および『時報』などで、そのうちの『新聞報』に掲載された広告が重要な情報を提供しているという。『新聞報』そのほかは、すべて上海図書館所蔵のマイクロフィルムだ。

『新聞報』を利用したところが新しい^{*2}。新聞が資料として有効だという認識を文迎霞が持っているのは、まことに正しい。

ということで、論文内容を順次紹介する。

検討すべきは、『繡像小説』の創刊、継続刊行、停刊という順序になる。

創刊

創刊については、私は『同文滬報』光緒二十九年五月初七日付の記事を提示したことがある。すなわち、『繡像小説』創刊号を贈呈されたという内容だ。『繡像小説』創刊号は該誌表紙裏の目次部分に「癸卯五月初一日」と印刷する。『同文滬報』の記事は約一週間後だから、ほぼ表示通りの刊行であったと推測したの

だ。

文迎霞は、『新聞報』同年五月初五日の商務印書館広告を示す。『同文滬報』よりも二日さかのぼる。これが新発見だ。『繡像小説』創刊号は、五月初一日の刊行だと考えてほぼよかろう。

もうひとつは、『新聞報』閏五月十五日に創刊号の再版を広告していると明らかにした。これも今まで知られていなかった事柄だと思う。文迎霞の新しい発見だ。

継続刊行

『繡像小説』については、触れるべきいくつかの注視点がある。

ひとつは、該誌第13期より発行年月日を記載しなくなることだ。文迎霞は、第12期までは毎月初一、十五日だと明記している。記述の都合で、それすらも実際は守られてはおらず、刊行遅延が発生していると主張するためだ。それは正しいのだが、第13期より刊行月日を記載しなくなったと念押しをしてもよかった。刊行が事実上遅れていたことが、日にちの記載を中止した原因とも考えられるからだ。

第1年24期まで、今まで考えられていた刊行月日と『新聞報』広告との時間差を詳細に掲げている(「《繡像小説》応刊行時間与広告時間対照表」37頁)。それによると、時間差は、創刊号が四日、第24期は二百四十三日になる。たぶん第2、3年についても対照表を作成しているはずだが、雑誌に掲載されなかったのは残念なことだった。

創刊号の時間差四日というのは、誤差の範囲内だろうから雑誌記載通りの刊行だと考えていい。だが、第24期の遅れはやはり目立つ。新聞の日付で「十一月廿三」を文迎霞は示しており、私が予想した光緒三十年年末とほぼ一致する。こう書けば、文迎霞は、樽本のいう年末とは約一カ月の差があるというかもしれない。だが、新聞広告に依拠するかぎり、おおよその期日しか特定できないと考える。それでも、約一カ月の差があると主張するのであれば、そうですか、と私はいうのみ。

文迎霞が先行論文を追跡し検討し、別の資料を提出して月日をより詳細に特定しているところを評価すべきだ。

停刊

李伯元の死去と『繡像小説』停刊が重なる。光緒三十二年三月だ。これが以前の定説だった。文迎霞は、畢樹棠と阿英の論文をかかげる。ふたりの説明が定説になったといたいわけだ。

たとえば、「畢樹棠は「繡像小説」という一文で、停刊の原因はあるいは編者李伯元がその月に死去したからかもしれない、と認めている」(36頁)と説明する。注をつけて、畢樹棠の該文が『文学』第5巻第1号(1935)に掲載され、魏紹昌編『李伯元研究資料』(上海古籍出版社1980)に収録してあることを示す。それはそうなのだが、魏紹昌が畢樹棠論文に対して行なった書き換えを文迎霞が指摘しないのは不十分だと考える。

文迎霞が説明するように、畢樹棠は

『繡像小説』停刊の原因を李伯元の死去かもしれないと書いてはいる。だが、畢は該誌の停刊を光緒三十二年三月だとは考えてはいない。畢樹棠の該当する個所を初出と魏紹昌編『李伯元研究資料』所収のものとならべて示す。

『文学』初出 停刊年月不明、約
在光緒三十二年之間(270頁)

魏紹昌編所収 停刊於光緒三十二年(丙午)三月(462頁)

畢樹棠は、『繡像小説』第72期に刊行年が記載されていない事実をはっきりと把握している。だからこそ、停刊の年月は不明だという説明になるのだ。これが正しい記述である。だが、魏紹昌は、畢樹棠の文章を、よりもよってその重要な部分を魏の独断で勝手にわざわざ書き換えてしまった。まことに余計なことであつたとくりかえさざるをえない。研究者としてはやってはならない種類の書き換えである、と以前から私は指摘している。この事実は、中国の学界では率直に書いてはならない種類のことなのだろうか。もしそうならば、遠回しにでもわかる説明をしてほしいものだ。そうでなければ、文迎霞は『文学』雑誌を掲げてはいるが、魏紹昌が行なった書き換えに気づかなかつたことになる。悪くすると『文学』雑誌そのものを確認していないのではないかと疑われる恐れさえ生じるだろう。

さて、停刊の時期である。張純と樽本の推測を紹介したあと、文迎霞は、『新

聞報』光緒三十二年十二月十七日(1907.1.30)の広告に全72期が刊行された趣旨のあることをのべる。すなわち、停刊した日時の下限を示すというわけだ。私が見つけた広告は『中外日報』同年同月十八日だから、一日しか違わない。文迎霞は、私と同じ結論に到達した。

誤解のないようにお願いしたい。私は自慢しているわけではない。研究方法の正しさが文迎霞によって証明されたと思うだけだ。文迎霞が新聞広告に注目したのは正解である。証明方法が正しければ、どのような資料を使用してもほぼ同じ結論に到達するだろう。

新聞は日付がついている点で有用な資料である、と私は考えている。しかも、利用できる資料がふえてきた。以前は見ること触ることもできなかった新聞が影印される、マイクロフィルムになる。だからこそ文迎霞は、私が実行したよりもさらに精度を高めて発行期日を特定することができたといえる。

編者

文迎霞が新しく提出しているのは、『神州日報』光緒三十三年丁未七月初九(1907.8.17)付の広告だ。南亭亭長李君伯元を特別に招いて雑誌を編集してもらったという内容のもの。いうまでもなく商務印書館が出稿した。私が確認した同じ広告は、同年九月初三日(10.9)付『時報』および『中外日報』、さらに初六日(10.12)付『時報』だ。それらよりも約二ヵ月も早い。文迎霞の新しい発見である。

文迎霞に対する期待

文迎霞論文は、『繡像小説』の編者および刊行遅延について従来よりも精確に考察を加えている。それが成功した原因は、『新聞報』と『神州日報』という資料を使用したからだ。

刊行遅延問題については、ここまで緻密に論じている。編者問題についても新しい資料を提出した。当然ながら、李伯元の死去後も『繡像小説』が継続刊行されている事実が確認されたということだ。文迎霞は、このことを知らないわけがない。ところが、それについては何も説明していない。不可思議である。原稿には言及をしているが掲載誌のつごうでその部分は発表時には省略されたのかどうかまではわからない。

文迎霞は、次に大きな問題がひかえていることは十分承知のはずなのだ。

李伯元の「文明小史」は、彼の死後に公表された部分は誰の執筆になるものか。「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係をどのように考えるのか。きわめて重要な問題だと私は考えている。ぜひとも文迎霞の意見を聞きたい。

文迎霞は、『繡像小説』刊行遅延問題と編者問題において彼女の鋭い感覚と慎重で確かな資料の取り扱い方を十分に示している。その後ろに存在している大問題についても、あざやかな結論を提出するはずだと私は信じて疑わない。 罫

【注】

1) 汪家熔が当時提起したのは、『繡像

小説』の主編者は李伯元ではなく夏曾佑であるという新説であった。しかし、汪は反論を受けるとふたたび夏曾佑説を出すことはしなかった。誰が考えてもありえない立論だったから当然だといえよう。今から約20年前のことだ。ところが、ありえないはずの夏曾佑説をわざわざ紹介している著作が、しかも最近出版されている。洪九来『寛容与理性《東方雜誌》的公共輿論研究(1904-1932)』(上海・世紀出版集團、上海人民出版社2006.11。295頁)である。私が『繡像小説』の編者問題について最終論文を書いてすでに数年が経過している。それがまったく視野に入っていない研究者がいるのだから、やはり中国は広い。

- 2) 陳大康「晚清《新聞報》与小説相關編年(1903-1905)」(『明清小説研究』2007年第2、3期(総第84、85期)2007発行いずれも月日不記)が、『新聞報』に掲載された『繡像小説』関係の刊行広告を採録している。文迎霞の掲げる『新聞報』の日付とは一致しない部分がある。

『清末小説から』第88号 2008.1.1
 最初の漢訳「ドン・キホーテ」...樽本照雄
 《哲理小説 哲学之禍》.....渡辺浩司
 近代小説家張毅漢生平統考.....郭 浩帆
 網羅精英 任人唯才.....張 英
 狄平子小説資料一則.....武 禧
 晚清小説作者掃描(拾參).....武 禧
 蔡元培を中傷した北京大学元教員.....樽本

November Joeの中国語訳(上)

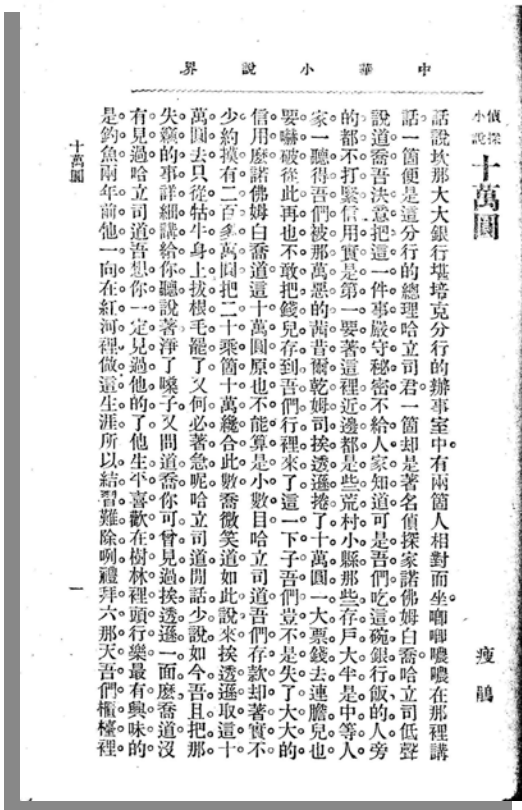
渡辺浩司

1

《中華小説界》第二卷第六期(編輯兼発行:中華小説界社,総発行所:中華書局,1915年6月1日出版)に《偵探小説 十萬圓》が掲載された。書名の下には、単に“瘦鵑”とだけ書かれており、一見、創作のように見える。『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)も創作と見なしている(643頁左s0772)。

しかし、実はこの作品は翻訳なのである。原作は、H. Hesketh Prichard『November Joe: The Detective of the Woods』(Hodder and Stoughton,1913年未見,Houghton Mifflin Co.,1913年未見,本稿では、Greenhill Books,1985年を使用した^{*1})に収められた作品の一つ、第八章の「The Hundred Thousand Dollar Robbery」である。

H. Hesketh Prichardは、1876年生まれ、1922年没の、イギリス人^{*2}。小説には、他にFlaxman Lowが活躍する『Ghosts, Being the Experiences of



り上げた《哲學之禍》を“屏周”とともに訳している。

2

まず「The Hundred Thousand Dollar Robbery」のあらすじを紹介する。

The Great Bank of Canada の The Quebec Branch の支店長 Harris から依頼があり、それは、同支店勤務の Cecil James Atterson が紙幣・証券を10万ドル分持ち逃げしたので、追跡してそれを取り返してもらいたいというものであった。

事件の経緯や Atterson について、Harris から細かく聞く。その途中、Atterson から Harris に宛てたからかいの手紙が届き、消印から共犯者がいると推測される。その後、Joe は、警官 Hobson と私(Quaritch)と共に追跡に向かう。

三人は、Roberville で Atterson の目撃者を訪ねた後、Joe の推理から Red River に向かい、途中で森と道を行ったり来たりしながら進む怪しい足跡を見つける。その足跡をたどりながら進み、1泊した後、ぶつぶつ言いながらうなだれて歩いている Atterson を発見し、逮捕する。

しかし、彼は窃盗について否定し、肝心のお金も見つからなかった。Joe らは彼の所持品や足跡、泊まった場所を調べたが、出てこなかった。そこで、Hobson は彼に食べ物や休憩を与えなければ警察に着くまでにお金のありかを自白するだろうと言い、Atterson を連れて、来た道に戻っていった。Joe と私は近くの川岸に行き、最近カヌーが着岸した跡を見つけ、その付近を調べた。それから、Joe

Flaxman Low』(母親との共作,Pearson,1899年^{*3})やDon Qが活躍する『The Chronicles of Don Q』(Chapman and Hall,1904年,Lippincott,1904年)などがある。

この『November Joe』は、カナダの森に住む若き猟師兼狩猟ガイドであり、警察の捜査を助けるセミプロ探偵でもある November Joe の事件簿である。書き方としては、有力実業家で、彼の理解者の Quaritch が一人称で記述する形式をとっている。

訳者の瘦鵑は、周瘦鵑、原籍は江蘇呉県、1895年上海生まれ、1968年没、作家・翻訳家・雑誌編集者として活躍した。同誌には、『清末小説から』第88号(清末小説研究会,2008年1月1日)掲載の拙稿「《哲理小説 哲學之禍》の原作」で取

は私に、Attersonが盗んだ金を盗まれたことやその犯人像を告げる。理由を求める私に、Joeは金を取り戻した後に、と言い、一緒にLendevilleへ向かう。午後の早い時間に到着し、そこでまず知り合いの農民McAndrewを訪ねる。Joeは彼から6週間前にAttersonが来た時の様子をうまく聞き出し、Pointarré家に向かう。他の家族に邪魔されないよう、二人姉妹の姉、Phèdreが牧草地にいることを聞き出し、そちらへ行く。Phèdreは背が高く、非常に魅力的であった。Joeは、Attersonが逮捕されたこと、お金が見つからなかったこと、彼が薬を盛られたこと等を話した。そして、Attersonが6週間前にここにやって来て、黒髪の魅力的な女性に恋をし、女の方はそれを利用して、彼にお金を盗ませ、手伝うふりをして、薬入りのウイスキーを渡し、逃走経路を聞き出し、彼が薬で眠らされている所にカヌーで現れ、そのお金を奪い、自分の痕跡を隠し、Lendevilleへ帰っていった、というような推理を話した。顔色を変えながらもしらを切る彼女に、Joeはお金を返すよう迫った。彼女はなおもとぼけていたが、Joeが警察の手に委ねると話し、そして彼が“November Joe”だと聞くと、お金がもどれば銀行に共犯の訴追をさせないこと、彼女については明かさないことを確認し、Joeにお金を返した。

Joeと私はケベックに戻り、Harrisが何も聞かず何もしないことに同意すると、すぐにお金を渡した。その晩、私はJoeに、どのようにしてPhèdreが自分の足跡

を消したのか、どうやって犯人像がわかったのかを尋ね、Joeは一つ一つ解説していった。

地名がわからず、20世紀初頭のカナダの森林やそこに暮らす人々の服装、使われているカヌーの形状が想像できないので、不十分なのだが、都市型探偵とは全く異なる探偵の活躍が楽しめる作品である。

3

中国語訳について述べる。

この『November Joe』は短篇集なので、私が見つけた2作以外にも翻訳されている可能性はある。それを探る手がかりとなる主な固有名詞の対照表を以下に掲げる。

原文	中国語訳
November Joe	諾佛姆白 喬
Quaritch	郭立克
Harris	哈立司
Cecil James Atterson	茜昔爾 乾姆司 挨透遜
Hobson	霍勃生
Phèdre Pointarré	菲特勒 卜杏泰爾
Canada	坎那大
Quebec	堪培克
Red River	紅河
Lendeville	蘭特維爾

内容については、省略が多く、改訳(或は誤訳)も見られる。物語に大きく関わる部分のみ指摘しておく。

まず人物設定であるが、事件の筆記役であるMr. Quaritchが中国語訳では、“助手”とされ、Attersonを追跡する途

中から登場する。このために、登場人物はすべて第三者として描かれ、時々見られるQuaritchの独白はかなり省略されている。また、物語の冒頭のJoeがこの事件に関わるようになった経緯が省略され、報酬の交渉場面が大きく改められている。後者について、原文と中国語訳を示す。原文の日本語訳は、『ノヴェンバー・ジョーの事件簿』(ヘスキス・ブリチャード著, 安岡恵子訳, 論創社, 2007年11月25日)を使用した。

‘H’m!’ coughed Harris. ‘My Directors won’t want to pay you two dollars a day for nothing.’

‘Two dollars a day?’ said Joe in his gentle voice. ‘I shouldn’t ‘a’ thought the two hundred times a hundred thousand dollars could stand a strain like that!’

I laughed. ‘Look here, November, I think I’d like to make this bargain for you.’

‘Yes, sure,’ said the young woodsman.

‘Then I’ll sell your services to Mr. Harris here for five dollars a day if you fail, and ten per cent. of the sum you recover if you succeed.’

Joe looked at me with wide eyes, but he said nothing.

‘Well, Harris, is it on or off?’ I asked.

‘Oh, on, I suppose, confound you!’ said Harris.

November looked at both of us with a broad smile. (149-150頁)

(「ふむ」ハリスは咳払いした。「彼を取り逃がしてしまったら、うちの重役連中

は、あなたに二ドルの日当を払うのをしるでしょうな」

「日当二ドルですか？」ジョーはやりわりとした口調でいった。「十万ドルの二百倍の予備金がありになるのであれば、それが負担になるとはとても思えません」

わたしは笑った。「ちょっといいかい、ノヴェンバー。きみに代わって、わたしに交渉させてもらえないか」

「ええ、どうぞ」若い森の男はいった。

「それでは、きみの報酬だが、もし失敗した場合は日当五ドルを、成功した場合は取り戻した総額の一割を支払ってもらおうということで、ミスター・ハリスに提示させてもらおうよ」ノヴェンバーは目を丸くしてわたしのほうを見たが、何もいわなかった。

「では、ミスター・ハリス、そういう条件でよろしいですね？」わたしはたずねた。

「ああ、まあ、それでいいだろう。何かうまいことしてやられたな」ハリスはいった。

ジョーは顔をほころばせて、われわれ二人のほうを見た。)(175-176頁)

中国語訳はまだQuaritchが登場していないので、JoeとHarris二人の会話になっている。

哈立司咳了一聲嗽。說道：“但是吾們出了你每天兩圓的酬金。你總得做些兒事呢。”

喬柔聲說道：“怎麼說。每天兩圓麼。

像貴銀行裏一共有二十箇十萬的巨款。卻酬吾此數。未免太少了些咧。”

哈立司微微笑了一笑。說道：“如此罷。現在不論事兒成功不成功。每天酬你五圓。一旦事兒成功。失款復得。便照此數加二十倍酬你如何。”

喬道：“如此你用吾了。”

哈立司道：“自然用你。”

諾佛姆白瞧著哈立司。輒然一笑。(4頁, 句点は原文のまま、コロンと引用符は補った)

(哈立司は咳払いをして言った「しかし我々はあなたに毎日2ドルの報酬を出せば、仕事をしてくれるのでしょうか。」

喬はおだやかに言った「何ですって？毎日2ドルですか？貴行には10万の20倍ものお金があるのに、私への報酬は少なすぎませんかね。」

哈立司は微笑んで言った「こうしましょう。今から仕事が成功しようがしまいが毎日5ドルをあなたに支払いましょう。仕事がうまくいってお金が戻った時には、20倍加えてあなたに支払いましょう、それでいかがですか？」

喬は「それならば、私を雇えるでしょう。」

哈立司は「もちろんあなたにお願いします。」

諾佛姆白は哈立司を見てにっこりと笑った。)

他に大きな省略箇所と言え、報酬交渉の前になるが、Harrisから事件の経緯を聞いている時にAttersonからの手紙が

届く場面がある。Joeはその内容からAttersonを犯人だと考えるようになり、また、その消印の時刻・投函場所から共犯者の存在を導き出す。重要な部分だと思っただが、中国語訳では両方とも省略され、いきなり追跡の道筋を説明する。中国語訳を示す。

喬聽罷。忙道：“快瞧那郵印。這信是從那裏寄來的。”

哈立司拈起信封來一瞧。答道：“立馬斯堪。禮拜日上午九點三十分發。”

喬撫掌道：“如此和吾們相去還不遠。算來不過三十里之遙。密司脱哈立司。你定能和那十萬圓再見咧。”(3頁)

(喬は(手紙の内容を)聞くと、すぐに「消印を速く見て下さい。その手紙はどこから出したのですか？」

哈立司は封筒をつまみ上げ、見て「立馬斯堪。日曜午前九時三十分。」

喬は手をたたいて「それならば、我々の所からまだ遠くないですよ、ざっと30里弱です。哈立司さん、その10万ドルときっと再会できますよ。」)

また、原文では、Attersonが追跡をかわすために森に入ったり道に出たりと迂回して逃走しているのだが、Joeが靴跡が同じなのでそれを見破る場面、更にその靴跡を追い、靴跡がつかない岩場などでは、ちょっとした傷や折れた小枝を手がかりに追跡する場面がある。この部分は、The Detective of the WoodsとしてのJoeがよく描かれている所なのだが、中国語訳では、前者は靴跡からどのよう

な靴かを説明する部分を除いて省略され、後者はAttersonが慌てて逃げているためにあちこちで枝を折ったり、小さな木を倒したりした事になっている。

最後の方にも大きな改訳(或は誤訳)が見られる。

共犯のPhèdre PointarréがJoeにお金を返す場面である。原文と中国語訳を示す。

Before dark she met us again. 'There!' she said, thrusting a packet into Joe's hand. 'But look out for yourself! Atterson isn't the only man who'd break the law for the love of me. Think of that at night in the lonely bush!'

I saw her sharp white teeth grind together as the words came from between them.^{*4}

'My!' ejaculated November as he looked after her receding figure, 'she's a bad loser, ain't she, Mr. Quaritch?' (165頁)

(日が暮れる前に、彼女はわたしたちにもう一度会った。「ほらこれよ」彼女はそういって、包みをジョーの手に押しつけた。「だけど、あなたも気をつけるのよ。わたしを愛して法を破った男はアターソンだけじゃないわ。夜、人寂しい森でよく考えるのね!」

その言葉を発しながら、彼女は鋭い白い歯で歯ぎしりしているのが見えた。

「やれやれ!」彼女の姿が遠ざかっていくのを見送りながら、ジョーは不意に声を上げた。「まったく往生際の悪い女ですよ、ミスター・クオリッチ」(195頁)

日落時菲特勒又如飛而來。把一箇小裏塞在諾佛姆白手中。一壁柔聲說道：“密司脫喬。世界上爲了愛情背法律的不但是挨透遜一人。你須得爲他留些餘地。別過於難爲他啊。”說罷。翩然而去。

諾佛姆白目送他的倩影。直到不見。回頭向助手道：“密司脫郭立克。這女郎也著實可憐呢。”(13-14頁)

(日が沈む頃、菲特勒は急いでやって来た。小さな包みを諾佛姆白の手に押しつけ、やさしい声で言った「喬さん、世界で愛のために法に背くのは挨透遜一人だけではないのです。彼のことを大目に見てやって、彼をあまり責め過ぎないで下さいね。」言い終わると、さっと立ち去った。

諾佛姆白は彼女を見送り、姿が見えなくなると、振り返って助手に向かい「郭立克さん、あの女性も本当に可哀そうだね。」)

以上のように、原文では共犯のPhèdreを捨てぜりふを吐いて立ち去る悪女として描いているが、中国語訳では、最後になって突然Attersonを気遣うやさしい女性に変えてしまっている。色仕掛けでAttersonを口説き、窃盗を実行させ、自身は兄弟にも全く気付かれないようにお金を奪い去るような周到さを持つ女性なのだから、計画が破綻した時に本性を現したと考える方が妥当だと思う。また、遺恨を持ったまま終わらせた方が別の話にPhèdreを再登場させることも可能だろう。そう考えると、急に人格を変え

てしまった中国語訳の方は、愛のために口を割らないAtterson、Attersonを心配するPhedre、同情するJoe、というように心根は善良な人たちばかりである、ということでもとめたかったのだろうか。或は、最後のPhedreのせりふも単なるふりりで、それにJoeも騙されるほどの根っからの悪女ということなのだろうか。とにかく、原文と訳文が大きく異なる所である。

中国語訳には最後に少し加筆が見られる。以下に示す。

助手拍了拍喬的肩。含笑說道：“好一箇強辭奪理的名家。”喬道：“誰教你打碎沙鍋問到底。”(14頁)

(助手は喬の肩を軽くたたいて、笑いながら「大した推理の名人だ。」と言うと、喬は「誰があなたに土鍋を壊させたんだ(=根掘り葉掘り尋ねさせたんだ)。」と言った。)

“打碎沙鍋問到底”はしゃれ言葉で、“打碎沙鍋”(土鍋を壊す)と、“壘到底”(底までひびが入る)、“壘”と“問”が同音なので、“壘到底”=“問到底”(徹底的に問い詰める)となるのである。確かに、最後はQuaritchの質問にJoeが答えて、推理の根拠を述べるのであるが、なくてもいいような加筆のように思える。

訳の出来はすばらしいとは言えないが、原著出版から3年とたたずに翻訳を出し、November Joeという異色探偵を紹介して

いたのは、やはり訳者の底本選びのセンスのよさを感じずにはおれない。 罫

【注】

- 1) これは、1936年版の影印のようである。目次に見える「Preface」がなぜか省かれている。また、日本語訳との比較から、初版と字句の異なる部分があるようだ。
- 2) Chris Morgan執筆「PRICHARD, K. and Hesketh」の項(David Pringle編『St. James Guide to Horror, Ghost and Gothic Writers』St. James Press,1998年)には、“Career”として、“Traveller, explorer, big-game hunter, sportsman, writer, soldier, and reputed real-life model for fictional heroes such as E. W. Hornung's “Raffles.” Fellow, Royal Geographical Society”と書かれており、様々な顔を持った人物である。
- 3) 戸川安宣「名探偵の世紀 - ノヴェンバー・ジョーと生みの親プリチャード - 」(『ノヴェンバー・ジョーの事件簿』(ヘスキス・プリチャード著,安岡恵子訳,論創社,2007年11月25日)所収)によると、雑誌掲載時には“E. and H. Heron”という筆名が使われ、単行本出版時には“K. and H. Prichard”名義になったそうである(314頁)。
- 4) 原文(Greenhill Books,1985年版)では、この“I saw……”の一文は省略されている。Jim St. AndreとRon Smythほかによって作成され、The

Mount Royal College Gaslight website (<http://gaslight.mtroyal.ab.ca/gaslight/NVJOEX08.htm>) で公開されている電子テキスト(2008年1月10日確認)から補う。また、その電子テキストは“ejaculated November as he looked after”の部分を“ejaculated November looking after”に作る。

【参考文献・ホームページ(HP)】

裴效維執筆“周瘦鵑”(馬良春、李福田 総主編《中国文学大辞典》第6巻,天津人民1991.10)

押川曠編「ライヴアル紳士録」(『名探偵読本5 シャーロック・ホームズのライヴアルたち』パシフィカ,1979.4.6)

押川曠編,押川曠、乾信一郎訳『シャーロック・ホームズのライヴアルたち』(早川書房,1983.6.30/2000.9.15二刷)

押川曠編,乾信一郎訳『シャーロック・ホームズのライヴアルたち』(早川書房,1983.10.15/2000.9.15二刷)

N・M卿管理HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」
<http://www.aga-search.com/>(2008年1月10日確認)

中国近代文学研究『留得』第17期(2007.11)が刊行されている。2007年10月、天津師範大学で開催された「全球化背景下的中国近代小説轉型」學術研討会などを特集する。

晚清小説作者掃描(拾肆)

武 禧

(零六六)

宣樊子

小説創作：《菲律賓民黨起義》《美利堅自立記》《檀香山華人受虐記》《俄土戰記》《劍綺縁》《娘子軍》《離鸞》《玫瑰花》《新儒林外史》

宣樊子：林獬(1874-1926)福建閩侯人。又名懈、獬、萬里，晚年名白水。字少泉、肖泉。號退室學者。室名生春紅室。作品署名有地雷、白話道人、白水山人、良廬居士等。幼從母讀，后入舅家私塾。少有文名。20歲任杭州蠶桑學堂、養正書院、求是書院講習。25歲，任《杭州白話報》主筆。同年到上海與蔡元培等創辦愛國女校。連續創辦《學生世界》《俄事警聞》《警鐘日報》《中國白話報》等。宣揚孫中山及其領導的革命。孫中山曾書“博愛”二字相贈。后三年，留學日本，入早稻田大學，學習法律、新聞。與黃興組織華興會，又一年參加同盟會。辛亥武昌起義勝利，任福建都督府政務院法制局局長和共和黨福建支部長。后當選國會衆議院議員，被聘爲總統府祕書兼直隸省督

軍署祕書長。民國4年，附和袁世凱稱帝，被袁委為參政院參政。帝制取消后，創辦《公言報》，又創辦《平和日刊》。1921年在北京創辦《新社會報》，以白水為筆名，發表政論文章，揭露軍閥政客的黑幕丑聞。1926年因《官僚之運氣》一文，揭露潘復與張宗昌相互勾結、狼狽為姦的丑聞，當晚遭軍閥張宗昌逮捕，翌晨被殺害於天橋。1986年，國家民政部追認為烈士。其女旅美華人、美國國防大學教授林慰君捐資在故鄉建立紀念堂、紀念碑。林獬是我國報業先驅。著作甚多，與劉師培合撰《中國民約精誼》。又有《各國憲法源泉》等。翻譯有《日本明治教育史》。撰寫多種外國名人傳記。小說創作見上。

(零六七)

惜紅居士

小說創作：《李公案奇聞》

惜紅居士：不見任何著錄。此書“序”及題詞作者亦不見任何著錄。

(零六八)

平情客

小說創作：《中東和戰本末紀略》

翻譯小說：《噫有情》

平情客：著名報人狄楚青有筆名“平情客”，與《中東和戰本末紀略》作者是否是一人待考。

狄楚青：(1875-1940)江蘇溧陽人。名葆賢，平、高，字楚青，楚卿，號平子。別號：平情、平情客、平情居士、平情外室、慈石、六根清靜人等。室名平等閣、寶賢庵。出生於書香官宦門第，父親狄學耕曾任知縣，喜書畫，好收藏。狄平子早

年中舉人，后留學日本，是康有為惟一江南弟子，與梁啟超為莫逆之交。“公車上書”他名列其中。1900年參加湖南瀏陽人唐才常發起組織的正氣會，參加“勤王討賊”自立軍任捐募款及購置軍火之職，起事三天即告敗，他潛避日本。武攻慘敗便棄武從文，遂以辦報、出版為計。1904年狄平子創辦《時報》，深受讀者歡迎，並團結了一批革命志士，網羅了一批人才，著名報人作家陳景寒、包天笑都曾效力於《時報》，使《時報》與《申報》和《新聞報》，形成了鼎足之勢。狄平子本人的《平等閣筆記》《平等閣詩話》都發表在《時報》上。狄平子創辦的有正書局，首開復印精品之先河。首創用珂羅版出版了很多珍品，尤其復印的精品幾可亂真。狄平子晚年篤信佛教，創辦有《佛學時報》。所著《論文學上小說之位置》《小說叢話》在小說界頗具影響。

(零六九)

良廬居士

小說創作：《救劫傳》

良廬居士：根據所見資料，中國近代署名“良廬”者有三人：一、林白水、二、張茂炯、三、胡思敬。

一說：林白水：(見本文“零六六”)

一說(《清末民初小說目錄》)：張茂炯(1875-1936)吳縣人，光緒乙亥生於杭州。字頌磐，頌清，又作仲清。號君鑑。自署良廬(有條幅款識：簫譜仁兄大人正良廬張茂炯)。父張世燾，字玉田，號幼鹿，曾任兩浙候補批檢所大使等。江蘇蘇州府吳縣優行廩膳生，1897年鄉試第二十四名。1904年赴京應考，中式第五十七名，

欽點主事，官度支部員外郎。1908年充度支部軍餉司副司長。民國間任鹽政院總務所長。1917年，袁世凱稱帝，任中國銀行監正。1919年-1922年編有《清鹽法志（三百卷）》。善書畫與詞曲。蘇州獅子林小方廳有其書撰楹聯“獅子窟中嵐翠合，細林仙館鶴書頻”。與曲學大師吳梅友善，吳梅以長輩事之。1929年與鄧邦述、顧魏城等九人結“六一詞社”。撰有《霜崖三劇·序》《瘦叶詞·序》等。印行有《良廬詞》《良廬詞續集》等。

一説（《中國通俗小説総目提要》）：胡思敬（1866-1918）江西新昌人。字瘦唐，漱唐、又作瘦塘。號瘦篁，退廬、良廬（《中國近代文學大詞》），室名問影樓。光緒二十一年進士。宣統間官遼東道監察御史等。所作多史料價值。有《驢背集》記庚子事變事。

關於《救劫傳》作者的真實姓名，現無定論。《中國通俗小説総目提要》認爲此“良廬”爲胡思敬。《清末民初小説目錄》認爲“良廬”是張茂炯。《福州晚報》刊文說明林白水亦名“良廬居士”。

以上三説皆有所據。從時間考慮，以上三人確都有可能。筆者以爲應從發表情況、行文特點、敘事內容、作者行踪等多方面進行考察分析。就發表情況而言，筆者以爲此“良廬居士”應是林白水。詳情待考。 ㊦

中国近代文学研究『留得』第18期（2007.12）および第19期（2008.1）が同時に発行された。清末小説研究会ホームページに紹介がある。

「林訳小説叢書」の作品数

沢本香子

本当にささいで小さな事である。だが、気になってしょうがない。

97、58、89、100という脈絡のない数字がでている。なんのことか。「林訳小説叢書」に収録された作品の数だという。叢書というシリーズ物に収録してある作品数だから、誰が数えても同じだろう。ところが、異なる数があがっている。なぜ一致しないのか、不思議だ。

林紓の翻訳が全部で何種類あるのか。私はここで数字をあげるつもりはない。これについても複数の数字がかかげられている。数え方による。なにを基準にするかで違ってくる。小説だけに限定するのか、単行本の有無、雑誌掲載の作品を含める、原稿になっているが未刊行であるものをどうするか。だから、私は、林紓の翻訳は200種をこえている、と表現する。

今ここで問題にしているのは、そのような複雑なことではない。単純至極、「林訳小説叢書」収録の作品はいくつあるのか、といているにすぎない。だが、

上にあげたように、少なくとも4種類の数字がある。どれが正しいのか。

商務印書館版「説部叢書」

「説部」とは、小説のことだ。小説を集めているから「説部叢書」という。群学社、改良小説社、小説進歩社なども「説部叢書」名で継続出版している。定期的に早く刊行されたのは、商務印書館のものだった。

今では、「説部叢書」といえば商務印書館版を指すようになっている。有名になるくらいに収録作品が多い。しかもその特徴は、外国翻訳小説ばかりを集めている点だ。だから「説部叢書」といえば、外国翻訳小説シリーズだと受け取られることが多い。小説という本来の意味の延長線上にあると考えればいいのか。それが定着してしまった。

商務印書館版「説部叢書」の成立過程については説明がある(樽本「商務印書館版「説部叢書」の成立」『商務印書館研究論集』2006.12.15)。

大筋を簡単にのべよう。

最初は、「説部叢書」という名称は存在しない。翻訳小説のいくつかは、単発で刊行されるだけ。1903年ころより「説部叢書」と命名され、シリーズものとしてかたちを整えはじめた。読者の好評を得て急速に収録作品を増加させていく。作品を一部入れ替えて改組しながら、最終的には第4集第22編(1924)までを発行した。

「説部叢書」として最初から綿密な刊行計画があったわけではなかったのだ。

その刊行は、商務印書館が金港堂と合弁をはじめめる時期に重なり、合弁を解消したのちも企画が継続された。20年をうまわる期間に、再版を重ねる作品もでてくる。その奥付に表示する刊行年月が正確でないため目録作成者の手間をふやしている。商務印書館自身が、詳細な目録を作成するのが本来あるべき姿だと思う。だが、該社が刊行した『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)は、発行年月も記述しないズサンなものだった。研究資料としては利用することができないのだからまったく無惨である。

それはさておき、林訳小説だ。

「林訳小説叢書」

本稿で使用する用語を説明しておく。作品は「種」で数える。あるひとつの作品が上下巻2冊で刊行されたばあい、1種2冊と表記する。上中下巻3冊であれば1種3冊となる。前編2巻、後編2巻は1種4冊だ。書籍の中で上下巻と表示していても、合冊して1冊であれば1種1冊と数える。「集」「編」は、もとの叢書に使用されたままである。

商務印書館版「説部叢書」は、上述の第4集第22編で停止した。1集100種で構成されるから単純に合計すると、全作品は322種になる。

この「説部叢書」には、林訳が125種収録された。その中から特別に選択して刊行したのが「林訳小説叢書」なのだ。第1集(表紙には提示されない)と第2集(「林訳小説」と表示。奥付なし)がある。



第1集と第2集では叢書名と表紙の意匠が異なる

簡単な問題だ。第1集と第2集はそれぞれ何種を収録したのか。

まったくの単純作業であって、誰がこう書いている、などと説明することではない。

ところが、紹介したようにいくつかの数字が乱立している。どうしてそうなるのか、説明したくなるではないか。

時間をさかのぼって私は橋川時雄の説明に行き着いた。

複数の数字

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（北京・中華法令編印館1940.10.25初版／名著普及会復刻1982.3.20）である。橋川の説明は信頼性が高い、と私は判断している。だから利用しているのだ。

その林紘の項目には、林訳を数えてつぎのように記す。

其の訳著に「林訳小説」、（一集九十七種、二集五十八種^{ママ}）、およそ一百五十六種、……247頁

「ママ」としたのは、カッコの位置が違うことを示しているのにすぎない。

第1集が97種、第2集が58種だと明記してある。合計して155種だ。それをなぜ「およそ156種」というのか。鄭振鐸が「林琴南先生」（『小説月報』第15巻第11号1924.11.10）であげたのが「156種」だった。それに引きずられたものかもしれない。ただし、鄭振鐸は、林訳全体を156種と数えただけのこと。「林訳小説

叢書」がそうだとっているわけではない。

これを見て中途半端な数だと思われるはずだ。「説部叢書」では、初集100編[種]、第2集100編などになっている。「林訳小説叢書」だけが、97種と58種では区切りが悪い。

橋川からかなり遅く、中国で数字をあげる人がいる。

鄭逸梅「林紓訳《茶花女遺事》及其他」(『書報話旧』上海・学林出版社1983.8)である。

該文は、のちに『鄭逸梅選集』第1巻(哈爾濱・黒龍江人民出版社1991.5)に収録された。さらに、「不懂外文の翻訳家林琴南」と改題のうえ同じ『鄭逸梅選集』第6巻(哈爾濱・黒龍江人民出版社2001.1)に再度収録される。その理由は私にはわからない。

林訳はすべて「説部叢書」第1集から第4集までの中に収録され、またそれぞれ単行本もある。のちに「説部叢書」第1集から第3集までに収録されたものを集めて「林訳小説[叢書]」第1、2集として刊行した。第1集は『吟辺燕語』から『玉楼花劫』まで全部で59種97冊、第2集は『大俠紅鬃露伝』から『戎馬書生』まで全部で58種89冊である。[林訳小説都列入《説部叢書》一至四集中，并各有単行本。後又把《説部叢書》一至三集中所列入林訳本，匯刊為《林訳小説》一、二兩集。第一集自《吟辺燕語》至《玉楼花劫》

止，共五十九種，九十七冊。第二集自《大俠紅鬃露伝》至《戎馬書生》止，共五十八種，八十九冊] 33頁

第1集が59種97冊、第2集が58種89冊だと説明してある。具体的な作品名をあげ、種と冊にわけて数字が詳細だ。それにしても、59種と58種というのもすっきりしない。いっそのこと各60種にすればいいと単純に考える。だが、そうはなっていないのだ。

「説部叢書」第4集所収の林訳作品は「林訳小説叢書」には入れていないと指摘している点には、注目すべきである。

これがなにを意味するかといえば、つぎの興味深い事実だ。つまり、「説部叢書」第4集に入っている林訳は1921-24年の刊行だから、「林訳小説叢書」の出版は1920年以前になる。なぜ、これが興味深いかといえば、「林訳小説叢書」第1集の発行は1914年6月だが、第2集の収録作品には刊行年月が基本的に記述されていないからにほかならない。

鄭逸梅によると、合計117種186冊になる。橋川のあげる数字第1集97種と鄭の第1集59種97冊は、「97」が共通する。また、橋川の第2集58種と鄭の第2集58種89冊は、「58種」が同じだ。異なる箇所があるにしても、共通する部分に目が行く。

鄭逸梅の説明は、「林訳小説叢書」の原物を手元においているからこそ書くことのできるものだ。種類と冊数までも示している。それほどまでに詳細であるのは、原物で確認したに違いない、と誰で

もそう思うだろう。

大木康「林紘」(山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会1995.9.1)に「……後に『林訳小説』(1集97種,2集58種)としてまとめて刊行された」(480頁)とある。当然、橋川、鄭逸梅のあげる数字が大木によって確認されたと受け取る。

ところが、「林訳小説叢書」については、以上とは別の数字が提示されている。

東爾「林紘和商務印書館」(『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1)である。

商務印書館はかつて彼(注:林紘)のために「林訳小説叢書」を2集、全部で100種を出版した。527頁

橋川があげた97種+58種の合計155種、鄭逸梅のいう合計117種186冊とも異なる。第1集と第2集で100種だというのだ。

東爾の数字をそのまま引用して注で示すのが、郝嵐『林訳小説論稿』(天津社会科学院出版社2005.2.175頁)である。

論文で言及がなくても、調べる方法はある。たとえば、上海図書館編『中国近代現代叢書目録』(香港・商務印書館1980.2)がある。「林訳小説叢書」の第1、2集ともに書名、原作者、訳者、頁数をかけている。上海図書館の所蔵本にもとづいているから信頼できそうに思う^{*1}。

これによれば、第1集は『吟辺燕語』から『離恨天』まで50種、第2集は『大俠紅鬃露伝』から『戎馬書生』まで50種、合計100種である。

記述が詳細だと思われた鄭逸梅の数字

が違うし、作品も一部が異なることがわかる。

叢書目録にもとづいて冊数を算出しようとするれば、少しむづかしい。原物のままを表示してあるはずなのだが、はっきりしない部分がある。

例をあげる。

22塊肉余生述前編二巻後編二巻(社会小説)(英)卻而司迭更司著 林紘 魏易訳 初版 上・下巻 636頁

原作は、CHARLES DICKENS “DAVID COPPERFIELD” である。

この記述を見ると、前編が「二巻」後編も「二巻」だが、それで「初版 上・下巻」という。前後編で合計4冊だと思われるが2冊かもしれない。

別の目録を参照してみよう。北京図書館編『民国時期總書目(1911-1949)』外国文学(北京・書目文献出版社1987.4)だ。

こちらには「塊肉余生述前編」と同「後編」が別に記載され、それぞれ2冊となっている。ならば、単純に合計して前後編4冊になる。

もう1例を叢書目録からあげる。冊数について同じ内容だ。

28玉楼花劫前編二巻後編二巻(歴史小説)(法)大仲馬著 林紘 李世中訳 初版 上下巻 637頁

原作は、ALEXANDRE DUMAS père “LE CHEVALIER DE MAISON-ROUGE” という。

こちら『民国時期総書目(1911-1949)』を参照する。それぞれが2冊だから、前後編あわせて4冊だ。

以上を合計すると第1集は97冊、第2集89冊という数字が得られる。

鄭逸梅があげたのは、第1集59種97冊、第2集58種89冊だ。種類数は間違っているが、冊数は一致する。鄭逸梅は実際に数えたであろう、という考えが強くなる。ただし、冊数を数えたのであれば、なぜ種類数が異なるのか。不可解なことだ。

結 論

この種の問題は文献操作だけで解決するものではない。「林訳小説叢書」の原物を手にとればいいのである。

ただし、それができないばあいは、上述したように資料を吟味して使用する以外に方法はないだろう。研究者の文章をひねくりまわすだけだと疑問が生じても解決の方法がない。複数の数字が提出された理由だと考えられる。

私は、手元のものを数えた。ところが、冊数があわない。よく見ると、あるべきいくつか欠けているのだった。全冊揃いを見ているわけではないことを正直に書いておく。

以上を総合すると以下ようになった。

「林訳小説叢書」は第1集50種97冊、第2集50種89冊を収録する。合計すれば、全100種186冊である。 罍

【注】

1) ただし、商務印書館版「説部叢書」の第1集については不正確だといわ

なければならない。10種が刊行されているにもかかわらず2種類しかかかげていないからだ(777頁)。残りの8種は所蔵していないらしい。

清末小説から

- 陳 建華 拿破崙与晚清「小説界革命」：從《泰西新史攬要》到《泰西歷史演義》 台湾『漢学研究』第23卷第2期 2005.12
- 寇 振鋒 清末の漢訳小説『経国美談』と戯曲『前本経国美談新戯』 明治政治小説『経国美談』の導入、受容をめぐる 名古屋大学『中国語学文学論集』第18輯 2006.3
清末政治小説の術語、概念の形成と明治政治小説との関わり 名古屋大学『言語文化論集』第29巻第1号 2007.11.15
- 根岸宗一郎 近代中国におけるギリシア文学 周作人と羅念生を中心に(付：古代ギリシア文学翻訳年表) 慶應義塾大学『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』第36号 2006.3
- 吳 淳邦 試論晚清翻譯与吳趸人的小説創作 徐志平主編『伝播与交融：第二届中国小説戯曲国際學術研討会論文集』台湾・里仁書局2006.3.30
- 黄 錦珠 晚清小説中の妻職与母職 徐志平主編『伝播与交融：第二届中国小説戯曲国際學術研討会論文集』台湾・里仁書局2006.3.30
- 王 燕 《繡像小説》概説 『繡像小説』全10冊 北京図書館出版社 2006.4
- 龔 敏 『黄人及其小説小話之研究』 濟南・齊魯書社2006.5

- 張 仕英 李伯元之夢解析 以《官場現形記》第六十回為中心 黃華珍、張仕英主編『知性与創造 日中學者的思考(2006-2007)』北京·中国社会科学出版社2007.3
- 宋 麗榮 歷史上的商務印書館館慶活動『出版史料』2007年第4期(新總第24期)2007.12.25
- 陳 大康 晚清《新聞報》與小說相關編年(1903-1905)續『明清小說研究』2007年第3期(總第85期)2007發行月日不記
- 張 淑蓉 中国俠文化的集大成之作《第一俠義奇女伝》的俠文化透視『明清小說研究』2007年第3期(總第85期)2007發行月日不記
- 范 伯群 【書評】為轉型期的中国文学史破解疑案 推介樽本照雄的《清末小說研究集稿》『中国現代、当代文学研究』2007年第8期2007.8
- 房 向東 “國粹”：“額上腫出一顆瘡” 魯迅與林紓『魯迅與他的論敵』上海世紀出版股份有限公司上海書店出版社2007.7
- 王宏志『重積“信、達、雅” 20世紀中国翻譯研究』北京·清華大学出版社2007.5
- 緒論：關於二十世紀中国翻譯研究
- 重積“信、達、雅” 論嚴復的翻譯理論
- “專欲發表區區政見” 梁啟超和晚清政治小說的翻譯及創作
- “暴力的行為” 晚清翻譯外国小說的行為及模式
- 民元前魯迅的翻譯活動 兼論晚清的意識風尚
- 『中国雅俗文学研究』第1輯 上海三聯書店2007.7
- 先驅者的啓示 紀念黃人《中国文学史》撰著百周年 ……王永健
- 黃人評箋 ……錢仲聯
- 黃人及其著作述略 ……曹培根
- 中国近代文学家黃人研究綜述 ……黃鈞達
- 論新文学家對現代通俗文学的評價 ……朱志榮
- “我們以後的路還很長” 范伯群先生訪談錄 ……李國平、王木青
- 文兼雅俗 博通古今 《姚鵠雜文集·小說卷》序 ……范伯群
- 【書評】史家的襟懷 論家的深刻 評范伯群等著《20世紀中国通俗文学史》 ……王木青
- 『現代中国』第9輯2007.7
- 中国電影批評的先驅 周瘦鵑《影戲話》讀解 ……陳建華
- 我們如何理解這個世界 《恨海》與晚清中国人的認同危機 ……李 楊
- 星軺筆錄中的人格與文章 晚清外交使臣對西方文明的反應 ……張 治
- 郭延礼『文学經典的翻譯與解讀 西方先哲的文化之旅』濟南·山東教育出版社2007.9
- 自序
- 歌德的中国情結
- 歌德作品在近現代中国的傳播
- 中国現代翻譯文学史上的“維特熱”
- 歌德的第一首中譯詩
- 海涅詩歌的漢譯
- 拜倫詩最早的中譯者
- 近代的“拜倫熱”
- 蘇曼殊譯拜倫詩
- 蘇曼殊與日本
- 蘇曼殊未英譯過中国古典詩歌
- 馬君武譯的《縫衣歌》
- 馬君武與德国文学
- 中国人識的第一部外国長篇小說《昕夕閑談》

英国小説《昕夕閑談》的作者、訳者和重訳本
 《迦茵小伝》所引起的風波
 王韜与《馬賽曲》
 中法文化使者的前驅：陳季同
 《巴黎茶花女遺事》在近代中国的伝播
 従小説《巴黎茶花女遺事》到話劇《茶花女》
 凡爾納在中国的百年之旅
 雨果作品在近代中国的伝播
 留法学人李石曾及其戲劇翻訳
 我国最早翻訳的科学小説
 托爾斯泰的中国之旅
 托爾斯泰小説の第一次中訳
 俄羅斯文学の第一の中訳本 普希金の《上尉の女児》
 普希金作品の中訳
 陳嘏訳屠格涅夫的《春潮》和《初恋》
 俄羅斯文学三大名家の早期訳者吳棹
 《俄国清史》是普希金《 》
 の中訳本
 克雷洛夫三篇寓言最早の中訳
 梁啓超与《佳人奇遇》
 《愛的教育》の改編与翻訳
 我国第一部阿拉伯訳詩《天方詩經》 兼説
 其歴史地位和文献価値
 劉半農与散文詩翻訳 紀念劉半農逝世70周年
 魯迅与科学小説の翻訳
 周氏兄弟訳の《域外小説集》

說嚴訳標準中の“雅”字
 “重訳”の背後
 王韜の日本之遊
 万千学子留学東西洋
 東西方兩位文化名人の交往：辜鴻銘与托翁
 19世紀末20世紀初東西洋《中国文学史》の
 撰写
 20世紀初的中国近代翻訳小説
 20世紀中国近代小説在全球の伝播
 《老殘遊記》在国外
 20世紀最初20年中国第一代女性翻訳家の脱穎
 中国女性文学史上兩部最早の国外遊記
 一位被遺忘の近代女翻訳家陳鴻璧
 近代女翻訳家黄翠凝
 東漸与西伝
 《巴黎茶花女遺事》与近代文学觀念の变革
 《巴黎茶花女遺事》与近代小説藝術の革新
 嚴復の翻訳理論
 偵探小説は資本主義社会の産物 兼説20世
 紀前中国無偵探小説
 20世紀初中国翻訳戲劇の出現
 中国近代翻訳小説中の日本文学
 応加強翻訳文学史溯源の研究
 翻訳文学对吳趸人小説創作の影響
 近代文学訳介中の文化選択意向和模式
 黄遵憲与中日文化交流
 譚嗣同《仁学》中“百年一覚”解

【清末小説研究会の本】

樽本照雄著

林紓冤罪事件簿

A5判 上製 箱入り 418頁 限定150部 定価：8,400円